

雨の日に



20230421



エリー



目次

本文	1
あとがき	3

本文

秋子はあまり丈夫な方ではない。
だから娘をバス通学と給食のある幼稚園に通わせた。
しかし体操教室に通いたいと言われ、週に1回路線バスと電車を乗り継ぎ迎えに行くことになる。
運動が苦手なのに、なぜ体操教室に通いたいのか、秋子には娘の気持ちがさっぱりわからなかった。
すぐにあきてしまうだろう。
やらない後悔よりやった後悔。
そんな気持ちでしぶしぶ承諾した。
けれども娘はなかなかやめると言わなかった。
毎週出かけることは負担が大きく、疲労がたまっていった。
肉体は限界をこえ、だるく、重く、足の付け根が痛んだ。
それでも母親の自分から体操教室をやめてくれとは言えない。

その日は朝から雨がしとしと降っていた。
雨が降ると神経が痛む。
自分に鞭打って娘の傘とカッパを用意して迎えに行く。
幼稚園から駅までは15分ほど歩く。
帰ったら夕飯の支度をしなければならぬ。
だが休まなければ動けそうにない。
早く家に帰って横になりたい。
つい歩みが早くなる。
ふいに静けさに気づく。
娘の足音が聞こえない。
振り返ると少しはなれた場所に立ち止まっていた。
「どうしたの？」
「歩けない」
さっきまで元気よく歩いていたのに、腹でもいたいのか。
娘のところに戻る。
痛がっている様子はない。
「はやく帰ろうよ」

「帰らない」

普段聞き分けがいいだけに訳が分からない。

「なにがあったの？」

「肩にハム太郎が乗ってるから歩けない」

え？

そんな架空の話を持ち出されても、なんと返していいか分からない。

「落ちないから大丈夫」

「落ちるからダメ」

心なしか雨が強くなった気がする。

お腹もすいてきた。

秋子は人生でこれほどの難題を経験したことがない。

一生ここから動けないのか。

誰か！

無情にも返事は返らない。

傘にあたるバラバラという雨の音だけが響く。

自分がなんとかするしかないと覚悟をきめる。

そうだ！

「ママが肩に乗せるから歩いて！」

娘がニッコリする。

秋子は娘の肩の位置までしゃがむ。

架空のハム太郎が飛び乗る姿が見えた気がした。

秋子が歩き出すと娘がついてくる。

ママなら落とさないと思ってくれるのだろう。

秋子は疲労も忘れ、ハム太郎を運んだ。

あとがき

実話ベースなので娘の許可を取って公開してます。
今では爆笑ネタです！

実際には、迎える前に一人でランチを楽しんだり、迎えた後で途中にあるパン屋で買い物したり、結構楽しかったです。

「出来事すべて羅列しちゃダメ！」を学んだから辛さを強調してるだけです。

技法としては成功してるけど、思い出としてはもやもやするそうです。
だからあとがきで弁明してます。

30年前、「自分にとって楽園とは？」を求めて社会制度を思い付きましたが、具体的に想像できてないからうまく書けない。
挫折につぐ挫折で書くことをやめようと思いました。

さらに考え続けて「最初の一步がわかって取り組んでいること」が個人的な楽園という結論に変わりました。

苦手な社会ではなく、得意な個人を書くにあたり、表現を勉強し直してるところです。

書きたい内容が決まったのだから、あとは書き方を工夫するだけです。
その練習として思い出を物語にしてみました。

雨の日に

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
